

4
預言者たち
聖徒伝 138

「お前の怒りは
正しいことか」

ヨナ書3～4章

ニネベの悔い改めとヨナの怒り

アウトライン

0. イントロダクション

I. ニネベの悔い改め ヨナ書3章

II. ヨナの怒り ヨナ書4章

III. まとめと適用

預言者の苦悩に思いを馳せ
主の憐れみを味わい知ろう



ニネベのレリーフ(大英博物館蔵)



【無垢の時代】

天地創造

【良心の時代】

墮罪
~大洪水

【人類統治の時代】

バベルの塔事件

【約束の時代】

アブラハム
~ヤコブ

【律法の時代】

イスラエル
王国時代
メシア初臨

【恵みの時代】

聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨

【御国の時代】

千年王国
大審判
新天新地

①エデン契約

②アダム契約

③ノア契約

④アブラハム契約

⑤モーセ契約

⑥土地の契約

⑦ダビデ契約

⑧新しい契約

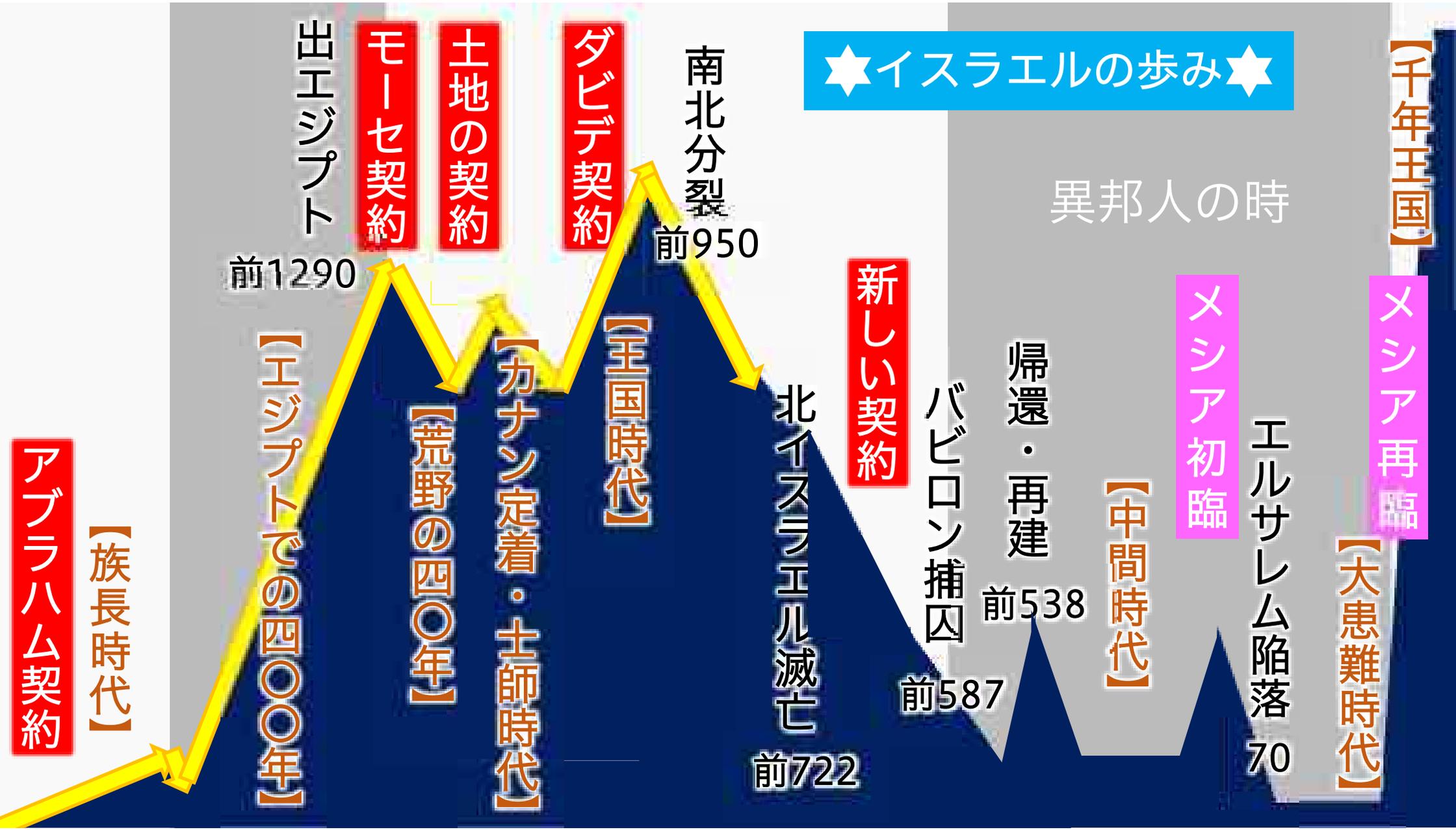
どの時代も
神の約束が礎にある

過去

現在

未来

★イスラエルの歩み★



預言者の働き・使命とは？

①シナイ契約・律法に従う

②律法を学び、民に教える

→誰より熱心に、深く律法を学び、実践しているのが大前提!!
トランス状態になる訓練をしていた訳じゃない!!

③預言(直接の神の言葉)を与えられたら、忠実に従い、伝える

→死んだ者も少なくない。命がけの任務。
ちょっと間違えました、なんてありえない!!

■預言を告げた経験もあったヨナは、逆方向に踏み出した瞬間に殺されて当然と覚悟していたはず。→むしろ死を願っていた？

ヨナ書とは？

- **著者** … **ヨナ** = “鳩” 父はアミタイ = “真理”
→ 真理に従う素直さ。従順さを示す。
- **出身** … ガテ・ヘフェル(ナザレのすぐ隣!!)
- **時代** … ヤロブアム2世の時代の
最盛期の北王国・イスラエル
- **背景** … 南北時代の絶頂期、バブルのただ中。
一方、主が告げた滅びの時は迫り、
北方から**アッシリア帝国**の脅威が!!



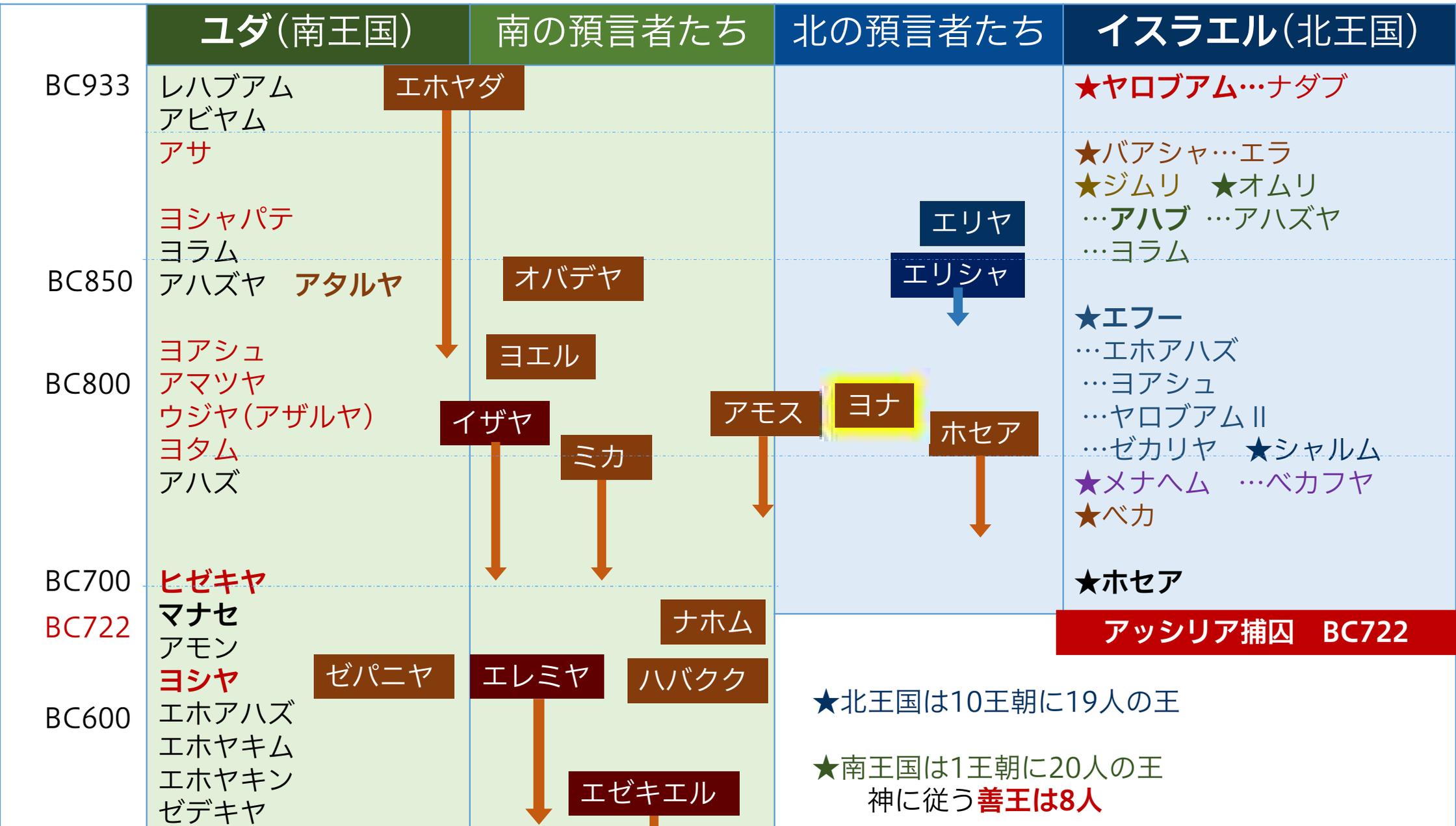
寓話ではない
歴史書である

アッシリアとは？



同胞を滅ぼす残虐な民を救いに導くことが、ヨナの使命!!

- 古代から存在。BC10～7世紀の新アッシリア後期に世界帝国に。
- BC722には、北王国・イスラエルを滅ぼす。(アッシリア捕囚)
- 最盛期にはエジプトまで支配。 → BC609 バビロニアより滅亡

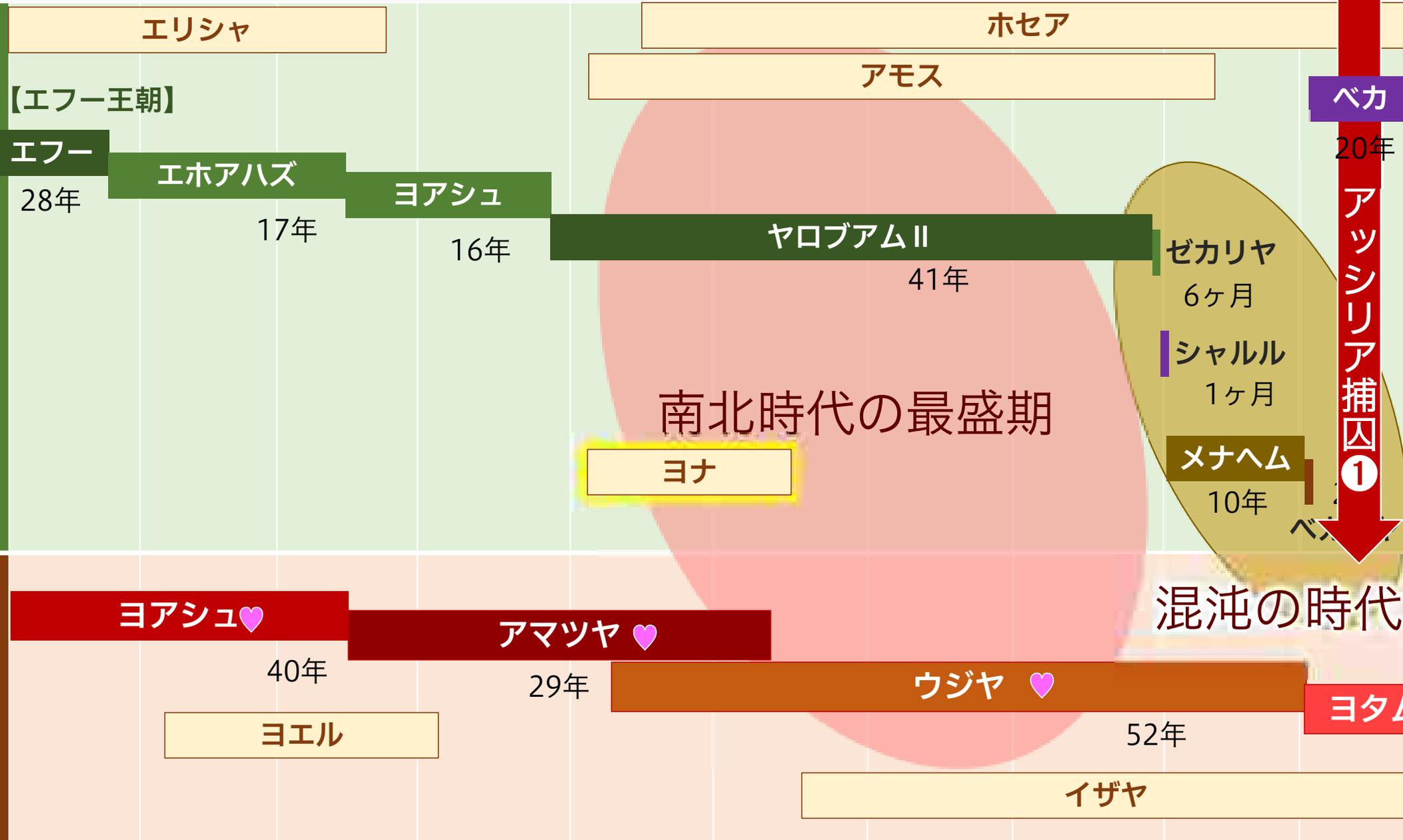


★北王国は10王朝に19人の王

★南王国は1王朝に20人の王
神に従う善王は8人

北王国 イスラエル

南王国 ユダ



南北時代の最盛期

混沌の時代

ベカ 20年
アツシリア捕囚①

ヨナ

ベカ
アツシリア捕囚①

ヨナ書1~2章 前回のあらすじ

■ 船に乗り真逆に逃走するが、大嵐に遭遇。ヨナが原因と知った水夫たちは、イスラエルの神を恐れ、従い、礼拝した。

■ 海に投げ込まれたヨナは魚に呑まれた。死んでよみにまで落ちたヨナは悔い改め、復活し、陸地に吐き出された。

■ 同胞を滅びに導く使命に従うより、死を願ったヨナは、死ぬこともできなかった。

主は、死の淵から戻ったヨナに、再度、命令を下される!!



1. ニネベの悔い改め

ヨナ書3章



【再度の命令】 ヨナ3:1～2

再びヨナに次のような【主】のことばがあった。「立ってあの大きな都ニネベに行き、わたしがあなたに伝える宣言をせよ。」

■誰も主から逃れられない。死ぬこともできないヨナに選択肢はない。

【二ネベ】 ヨナ3:3

ヨナは、【主】のことばのとおり、立って二ネベに行った。二ネベは、行き巡るのに三日かかるほどの非常に大きな都であった。

- バベルの塔を建てたニムロデの町の一つ。アッシリア帝国最盛期の首都となった。
- 現在残る遺跡は、中核部分のみだが、東京ドーム100個分、皇居の二倍、鹿追町の市街地の4倍の広大な遺跡。



二ネベの遺跡

【ニネベでの預言】 ヨナ3:4

ヨナはその都に入って、まず一日分の道のり*
を歩き回って叫んだ。「あと四十日すると、
ニネベは滅びる*。」

*江戸時代の旅人だと30kmくらい

*主の言葉をそのまま伝えるのが預言者。

主が告げた言葉が、これだけだった。

→実際に語ったのはアラム語か？

■短い言葉に込められた神の促しは、

「このまま40日過ぎるならば」すなわち、

「悔い改めなくば」 滅びるということ。



これ以上のことを言うよう
には示されていないだろう



【ニネベの人々の応答】 ヨナ3:5～6

すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者から低い者まで粗布をまとった。このことがニネベの王の耳に入ると、彼は王座から立ち上がって、王服を脱ぎ捨てて粗布をまとい、灰の上に座った。

■ 即座に悔い改めたニネベの人々、なぜ？

■ 第一は、主ご自身による働きかけ。

敵意を抱き、苦悶して救いの道を告げるヨナの尋常ならざる言葉が人々の胸に刺さったか。



【王の布告】 ヨナ3:7~8

そして、王と大臣たちの命令によって、次のような布告がニネベに出された。「人も家畜も、牛も羊もみな、何も味わってはならない。草をはんだり、水を飲んだりしてはならない。

人も家畜も、粗布を身にまとい、ひたすら神に願い、それぞれ悪の道と、その横暴な行いから立ち返れ。」

- イスラエルでも見られないほどの、徹底した悔い改めが布告され、実行された。



【神の憐れみ】 ヨナ3:9～10

「もしかすると、神が思い直してあわれみ、その燃える怒りを収められ、私たちは滅びないですむかもしれない。」

神は彼らの行いを、すなわち、彼らが悪の道から立ち返ったのをご覧になった。そして神は彼らに下すと言ったわざわいを思い直し、それを行われなかった。

- ニネベの人々は、主の求めを汲み取り、主の呼びかけに応え、わざわいを免れた。





II. ヨナの怒り

ヨナ書4章

【ヨナの憤り】 ヨナ4:1～2

ところが、このことはヨナを非常に不愉快にした。ヨナは怒って、【主】に祈った。「ああ、【主】よ。私がまだ国にいたときに、このこと*を申し上げたではありませんか。それで、私は初めタルシシュへ逃れようとしたのです。あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのに遅く、恵み豊かで、わざわざを思い直される方であることを知っていたからです。

*悔い改めたニネベを主が赦される

→やがて北王国を滅ぼすと知っているヨナ



【ヨナの訴え】 ヨナ4:3~4

「ですから、【主】よ、どうか今、私のいのちを取ってください*。私は生きているより死んだほうがましです。」

【主】は言われた。「あなたは当然であるかのように怒るのか。」

*拒んで逃げ出した時からずっと願っていた。

→同胞に滅びをもたらす使命を果たすくらいなら、死んだ方がいいと。

*「お前は怒るが、それは正しいことか(共)」



【仮小屋と唐胡麻】 ヨナ4:5～6

ヨナは都から出て、都の東の方に座った。そしてそこに自分で仮小屋を作り、都の中で何が起こるかを見極めようと、その陰のところに座った。

神である【主】は一本の唐胡麻*を備えて、ヨナの上をおおうように生えさせ、それを彼の頭の上の陰にして、ヨナの不機嫌を直そうとされた。ヨナはこの唐胡麻を非常に喜んだ*。

*インド～中東～アフリカで栽培。ひまし油が採れる。育成が早く、1～2年で木のようになる。

*死にたい、が、苦痛は逃れたい、この矛盾。



これが人間

【枯れた唐胡麻】 ヨナ4:7～8

しかし翌日の夜明けに、神は一匹の虫を備えられた。虫がその唐胡麻をかんだので、唐胡麻は枯れた。

太陽が昇ったとき、神は焼けつくような東風を備えられた。太陽がヨナの頭に照りつけたので、彼は弱り果て、自分の死を願って言った。「私は生きているより死んだほうがましだ。」

■ 己の運命を嘆き、理不尽だと憤る。

ヨナの怒りは、人の怒りの根源。

私たち、すべての人の怒りに共通するもの。



【神の問い】 ヨナ4:9

すると神はヨナに言われた。「この唐胡麻のために、あなたは当然であるかのように怒るのか。」ヨナは言った。「私が死ぬほど怒るのは当然のことです*。」

*「怒りのあまり狂い死にそうです(口語訳)」

■ 神との直接のやりとりを当然とする、ヨナの愚かさも浮き彫りになっている。



【主の応答】 ヨナ4:10

【主】は言われた。「あなたは、自分で労さず、育てもせず、一夜で生えて一夜で滅びたこの唐胡麻を惜しんでいる。」

- 私たちが当然だと手にしているものすべては、神から一方的に与えられた恵み。
- 心臓の鼓動一つすら、自分では打てない。私の命すら、私のものではない。



ヨナ書4:11

「ましてわたしは、この大きな都ニネベを惜しまないで
いられるだろうか。

そこには、右も左も分からない十二万人以上の人間と、
数多くの家畜がいるではないか。」



IV. まとめと適用

預言者の苦悩に思いを馳せ
主の恵みを味わい知ろう

預言者ヨナが、最初から分かっていたこと

- 背きを重ねたイスラエルを、神はアッシリアにより裁かれる。
- ヨナが警告を告げたなら、ニネベは悔い改めて赦される。
滅びを免れたアッシリアはやがて、イスラエルを攻め滅ぼす。
- 預言者の使命は、忠実に神の言葉を取り次ぐこと。
主の命令に背けば、ただちに命を取られても仕方がない。
- 神の言葉はすべて必ず、その通りになる。

分かっているのに背き、死を願ったヨナの愚かさこそ、罪人の本質

ヨナが抱え、自らさらけだしている矛盾

「あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのに遅く、恵み豊かで、わざわざを思い直される方であることを知っていた」

- イスラエルも、ヨナ自身もまた、主の憐れみの内に生かされている。
- ヤロブアム以来、主に背く偶像礼拝の罪をひたすら重ねながら、滅亡を宣告されながら、なお最大の繁栄を謳歌していた北王国。
- 神の約束に守られていたイスラエルが負っている責務があり、愚かな民を、それでも導き続けてこられた神の忍耐がある。
- 主が宣告された北王国の裁きに、抗う余地がないのは明白だった。

ヨナに与えられた使命の重さに思いを馳せよう

■ 主の命令は、羊飼いに、ライオンに餌を与えさせるようなこと。我が子の命を狙う瀕死の殺人者を誰が助けようなどと思うだろうか。

■ 預言者に求められるのは、神の民イスラエルを誰よりも愛すること。ヨナの苦悩を、主がご存じなかったわけではない。

■ 滅びの淵からヨナを引き上げられた神の深い愛を思う。過酷な使命に遣わされたヨナを、主は深く憐れみ、支えられた。

■ むしろ主は、その葛藤をも含めてヨナを用いられた。苦悶するヨナの宣告は、ニネベの人々に真実として迫っただろう。

主の言葉をヨナはどう受け取ったのか？

「ましてわたしは、この大きな都ニネベを惜しまないでいられるだろうか。そこには、右も左も分からない十二万人以上の人間と、数多くの家畜がいるではないか。」

- ニネベへの主の憐れみの言葉は、イスラエルには、滅びの宣告にも等しいと言える。
- しかし、同時にヨナは、自分とイスラエルが、どれほど主に愛されているか。その真実をも知らされたことだろう。
- ヨナの返答はない。ヨナはもう、何も答える必要はなかった。ヨブがそうしたように、ヨナの沈黙は、主の愛を受け取った証しだ。

聖書に暗示されたヨナのその後

- ヨナ書があるのは、ヨナ自身がこの体験を告白したから。
→ ペテロの否認を私たちが知っているのと同じこと。
- この出来事そのものが神の預言なら、民に告げるのが預言者の使命。
帰還した北王国で、サマリヤで、ヨナが、これを告げただろう。
- 民にののしられながらもヨナは、主の憐れみを語っただろう。
- 神に背いた預言者をも、敵対する異邦人をも、
これほどに憐れまれる主は、
どれほどにイスラエルを愛し、悔い改めを願っておられるか。

エルサレムへの主イエスの嘆き

■ ルカ福音書13:34~35

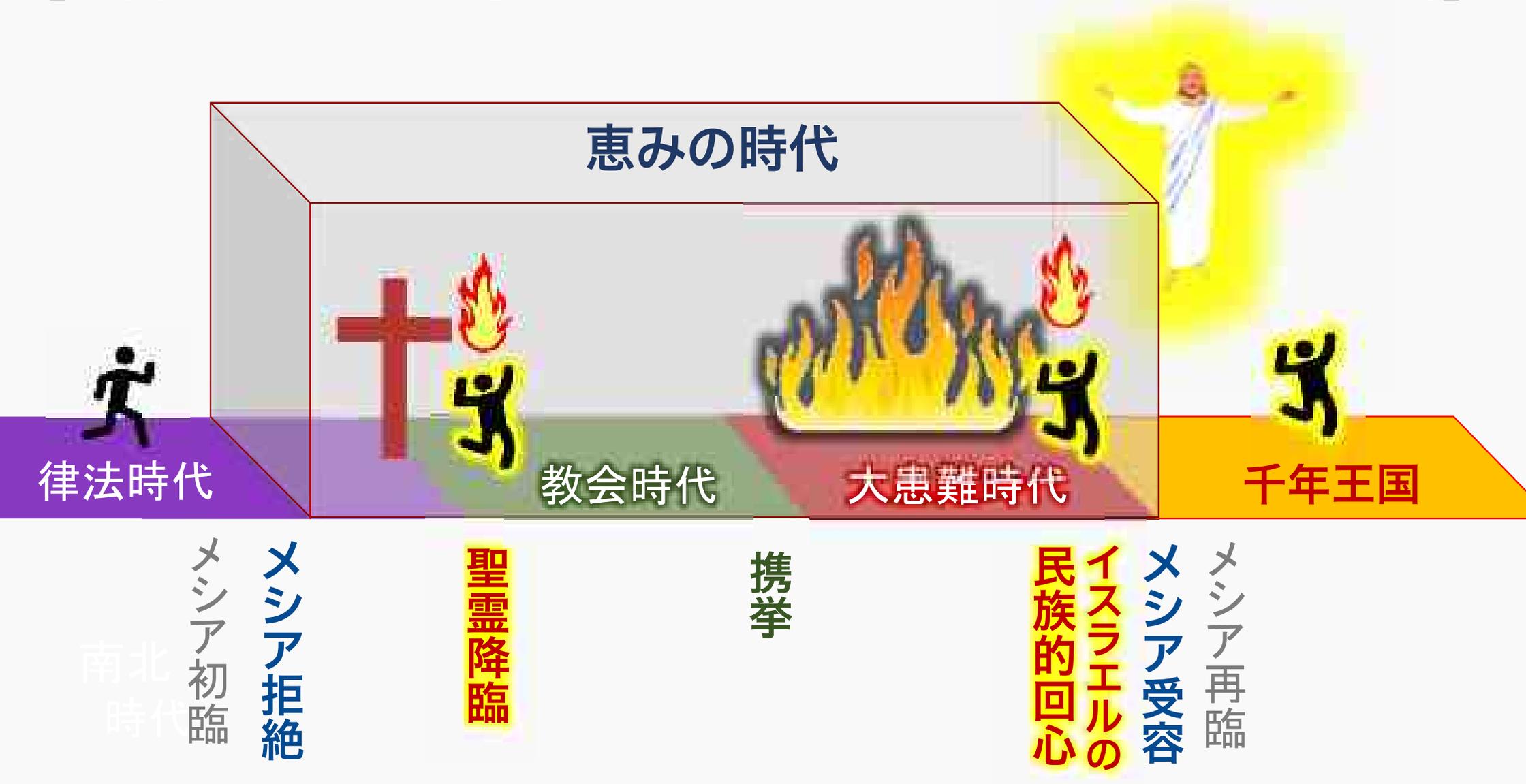
エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。

見よ、おまえたちの家は見捨てられる。わたしはおまえたちに言う。おまえたちが『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』と言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」

主イエスのエルサレムへ愛と嘆きと、その先の希望

- 主イエスの宣告通り、エルサレムは滅んだ(AD70年)以来、イスラエルの離散が続いた。
- 国家は回復されたが、不信仰のままの帰還の先に裁きがある。大患難時代が、イスラエルへの裁きとして主から下される。
- しかし、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』と言うイスラエルの悔い改めの時は来る。
- 預言者たちが受け取ったのも、究極的なイスラエルの回復の時。

【預言者ヨナも受け取っていたイスラエルの裁きと回復の預言】



預言者ヨナの信仰に思いを馳せよう

■ ヨナに与えられた過酷な試練は、信仰者の証明でもある。同じく、過酷な試練に遭わせられた、ヨブ、ダビデにも並ぶ信仰。

■ 究極の試練の中、ヨブは、はからずして、メシアを告白している。
「ヨブ記 19:25 私は知っている。私を贖う方は生きておられ、
ついには、土のちりの上に立たれることを。」

■ ダビデもまた、詩歌の中に受難のメシアの預言を残した(詩篇22篇)。ダビデは、ヨブと同じく、過酷な試練の中で、逃れようとも逃れられない、主の憐れみと恵みを、恐れの中に歌っている。

詩篇139:1～16

<指揮者のために。ダビデの賛歌。>

139:1 【主】よ あなたは私を探り知っておられます。

139:2 あなたは私の座るのも立つのも知っておられ
遠くから私の思いを読み取られます。

139:3 あなたは私が歩くのも伏すのも見守り
私の道のすべてを知り抜いておられます。

詩篇139:1～16

139:4 ことばが私の舌にのぼる前になんと

【主】よ あなたはそのすべてを知っておられます。

139:5 あなたは前からうしろから私を取り囲み

御手を私の上に置かれました。

139:6 そのような知識は私にとってあまりにも不思議

あまりにも高くて及びもつきません。

詩篇139:1～16

139:7 私はどこへ行けるでしょう。あなたの御霊から離れて。

どこへ逃れられるでしょう。あなたの御前を離れて。

139:8 たとえ私が天に上ってもそこにあなたはおられ

私がよみに床を設けてもそこにあなたはおられます。

詩篇139:1～16

139:9 私が暁の翼を駆って海の果てに住んでも

139:10 そこでもあなたの御手が私を導き

あなたの右の手が私を捕らえます。

139:11 たとえ私が「おお闇よ私をおおえ。

私の周りの光よ夜となれ」と言っても

139:12 あなたにとっては闇も暗くなく

夜は昼のように明るいのです。暗闇も光も同じことです。

詩篇139:1～16

139:13 あなたこそ私の内臓を造り

母の胎の内で私を組み立てられた方です。

139:14 私は感謝します。

あなたは私に奇しいことをなさって恐ろしいほどです。

私のたましいはそれをよく知っています。

詩篇139:1～16

139:15 私が隠れた所で造られ地の深い所で織り上げられたとき
私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。

139:16 あなたの目は胎児の私を見られ

あなたの書物にすべてが記されました。

私のために作られた日々が しかもその一日もないうちに。

詩篇139:1～16

139:17 神よあなたの御思いを知るのは なんと難しいことでしょう。

そのすべてはなんと多いことでしょう。

139:18 数えようとしてもそれは砂よりも数多いのです。

私が目覚めるとき 私はなおもあなたとともにいます。

詩篇139:1～16

139:19 神よどうか悪者を殺してください。

人の血を流す者どもよ 私から遠ざかれ。

139:20 彼らは敵意をもってあなたに語り

あなたの敵はみだりに御名を口にします。

139:21 【主】よ 私はあなたを憎む者たちを憎まないでしょうか。

あなたに立ち向かう者を嫌わないでしょうか。

139:22 私は憎しみの限りを尽くして彼らを憎みます。

彼らは私の敵となりました。

詩篇139:1～16

139:23 神よ私を探り私の心を知ってください。

私を調べ 私の思い煩いを知ってください。

139:24 私のうちに傷のついた道があるかないかを見て

私をとこしえの道に導いてください。

★すべてをご存じの主の最大の愛に思いを馳せよう★

■すべてをご存じの主に信頼し、思いのすべてを注ぎ出したダビデ。ヨナもまた、苦悩と葛藤を、主の前にすべてさらけ出した。

■憐れみの主が、私のすべてを知ってなお、愛してくださっている。

■人間の愛で、主の愛を理解できるはずがない。

地上に現された、神の最大の愛、最大の犠牲に思いを馳せよう。

➡滅びに向かう罪人である私たちのため、主は、愛するひとり子、イエスを十字架にかけられ、贖いとされた。

福音を信じることよってのみ、神の愛は人に理解可能なものとなる

「天のお父さま。わたしは、あなたに背き、罪を重ねてきました。

わたしは、まぎれもない罪人です。この罪をゆるしてください。

わたしは、神のみ子イエス・キリストが、

①わたしの罪を贖うために十字架で死に、

②墓に葬られ、

③三日目に復活したこと、を信じます。

主よ、あなたは、わたしのすべてご存じで、なお用いてくださいます。

言い逃れの余地など、どこにもないと思い知らされます。

ただ主を信頼して、与えられた使命に遣わしてください。

試練のただ中でも、主の愛をこそ、味わい知って行けますように。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」